

じんけん瓦版

第16号

発行：日本聖公会東京教区 人権委員会

発行日：2021年3月28日

第26回 世界エイズデー礼拝メッセージ

井上洋士（HIV Futures Japan プロジェクト代表）

人権委員会では、世界エイズデー（12月1日）の近い日に、カトリック中央協議会 HIV/AIDS デスク、宗教とLGBTネットワーク、ルーテル HIV/AIDS プロジェクトと共催で、「世界 AIDS・DAY 記念礼拝」を捧げています。昨年は、コロナ禍で一堂に集まっていた礼拝は出来ませんでした。オンライン配信により12月1日実施することができました。礼拝の中で、井上洋士さん（HIV Futures Japan プロジェクト代表）からメッセージをいただきました。要約を寄稿いただきましたので、以下に掲載いたします。

私は、HIV 陽性の方々の生活の質をあげることを目指して研究に取り組んでいる1研究者です。1993年ごろから HIV の課題に取り組み始めました。1993年は、まだ研究者でもありませんでした。私自身、HIV やエイズについてあまり知らない状態でもありました。ですが、当時、私の身近のある方が検査に行くと HIV に感染しているということがわかり、そこに私がかかわるようになってから、私の生き方そのものが変わってきたと思います。

当時、HIV あるいはエイズには、今のようないい薬はありませんでした。AZT という薬と DDI という薬が世に出て、ちょうど3つめの DDC という薬が販売されはじめたころだと記憶しています。そのころは、薬を飲んで副作用に苦しみながらも2年ほど延命するべきなのか、それとも薬を飲まず副作用にも苦しまず、早く死ぬべきか、どちらを選ぶのがいいのかというような話が HIV 感染された方々の中ではされていました。コーラを飲むと体調がよくなるという話もされていました。ただ、一応、保健医療分野出身者である私としては、そのころ、2つの薬を併用して一緒に飲むと、かなり効果が上がるという情報があることを耳にしていたので、そしてさらには、ずっと効果的な薬の開発がされまもなく世に出るといった話も聞いたので、そうしたあきらめに近い議論がそろそろ時代遅れになりつつあるのではないかと、疑っていたところでもありました。

当時の私は、支援者として、HIV に感染している方々と多く知り合うことになりました。そもそも日本国内にいて HIV に感染している方々は、情報がなく、もしかしたら無理やりあきらめさせられているのではないかと、そんな気分にもなりました。医療機関の HIV 感染者受け入れ拒否は今と違って当たり前のようにありまして、受け入れても治療を受けさせてくれないというようなことも多かった時代でした。こうした状況がどうにも納得できないという感覚を持っていた私は、本当にこれでいいのだろうか、若いなりに疑問に思ったりしていました。

そこで、アメリカはサンフランシスコとニューヨークに渡り、日本国内で思われているような状態が本当に正しい状態なのか、もしかして情報が知られていないだけではないか、確認してみようと思いました。今と違ってインターネットもあまり発達していなかったため、直接行くしかなかったのです。結果としてわかったこと。それは、アメリカではかなり情報が浸透していて、治療が進歩してきていることが知られるようになってきているが、日本では患者が、そして実はあとからわかったのですが、医療者や支援者、ひいては一般市民も、治療の進歩についての情報は知らないという状況に置かれているということがわかりました。特にサンフランシスコでは、HIV 陽性者を支援するボランティア団体がたくさんあり、それぞれの団体のメンバーの方々が丁寧に説

明してくれて、いまの治療の状況、近い将来に手に入る可能性が高い有望な治療について教えてくれました。そして、それらについて書かれている書籍やニューズレターなどを自由にコピーして日本に持ち帰り、日本の HIV 陽性者の皆さんに知らせて力づけてくれと言われました。これが、その後、私が HIV やエイズに携わるようになった原点です。

その後、持ち帰った資料を日本語訳して、ニューズレターとしてまとめ発行するという作業をいたしました。数人でやるようになっていたのですが、患者も市民も、こうした HIV やエイズの情報を知らされずに、むしろあきらめさせられているということに対して、ある種の大きな怒りを抱いていたのが、おそらくそのころの私のエネルギーとなっていました。とはいえ、病いは、知ったからといって、すぐに治るというわけではありません。多くの方々が亡くなるのを目の前にしました。この前会った方が、この前ドイツニーランドと一緒にいった方が、この前食事をともにした方が、もうこの世では会えないという状況に陥っていったのです。

1997 年くらいからは、薬害 HIV 被害者との研究に誘われ、一緒に進めることとなりました。というのも、そもそも薬害被害にあったのは、情報をきちんと知らされなかったこと、必要な情報はきっと教えてもらえるはずという受け身の体制にあったことが原因だと被害者の方々が考えておられ、最新の情報を知らされることの重要性という点で、意見が一致したからでした。私も、研究者として素人ではダメだと考え、大学院に行ったりして勉強し、被害者のうち患者や遺族、家族の調査などにもたずさわりました。

しかし、薬害被害者らも、HIV だけでなく、悪性腫瘍や肝炎など、HIV 感染被害に関連した理由で亡くなる方が後をたちませんでした。薬害被害者の研究に誘ってくれたり、その後一緒にがんばってくれた被害者の方々が次々と世を去りました。そのころ、私は、教会に行くと、祈りのとき、亡くなられた方々を走馬灯のように思い出し、感謝する時間に充てていた覚えがあります。あの人とこんな時間を過ごし、この人とはあんな時間を過ごした、、、、などと思いつく時間です。次第に、思い出さなければならな

い方々の数は増える一方となりました。

このころ、曲りなりにも 1 人前の研究者として生きる道を選ぶようになった私は、怒りだけではエネルギーが持たないことにも気づかされました。そして亡くなられた方の方に支えられているのではなく、この世におられる方々にも感謝しなければならない、皆さんに生きる道を作ってもらい、進んでいけるのではないかと、そう思えるようになってきたのです。実際、亡くなられる方の数は増える一方で、どなたが生きておられるのか、どなたが亡くなられているのかは、わからない状態になってきました。むしろ、それはどうでもいいと考えるしかない状態になってきたともいえるかもしれません。とにかく、この世におられようが、そうでなかろうが、祈りの時にできる限り思い出す、そういう習慣に変わってきたと思います。

時がたち、今、治療薬は驚くほど進歩しました。検査を受けて適切な治療を受ければ、HIV に感染していない人と同じくらい長く生きられるようになりました。それどころか、最近では、効果的な治療を受けなければ、性感染しないという病気に変化しつつあります。私も幸い、まだ生きています。生きていどころか、当時自分自身が想像もしていなかった高齢期を迎え、定年年齢が少しでも上の職場探しなどをしています。まだ生きていけるということは、きっとこの世ですべきことがたくさんまだ残されているのだと感じています。私の父親は 90 歳近いのですが、父もまだ健在で、仕事をしています。父の年齢まで仕事をするのかと思うとぞっとするところもありますが、それでもそれは私のやるべきこととして与えられた時間かもしれないと考えるようにしています。

祈りのとき走馬灯のように、私がかかわらせていただいた人々を思い浮かべることは、もう私はあまりしなくなりました。思い浮かべるべき人が多すぎて、もう無理になってきたのです。それに、HIV やエイズで亡くなる人ばかりではなく、最近では、お世話になった方々が高齢になって、あるいは他の病いで倒れて去ることが多くなりました。

私はいま、むしろ、誰かのために少しでも役立つことをしているだろうか、もしそうでなければ少しでも役立つことができるようにと祈ることが多くなっ

てきた気がします。それでも、ときどき、頭の中に、亡くなられた方々を思い浮かべます。本当はまだやりたいことがたくさんあったのではないかと、そんなことを思いながら思い浮かべるのです。

いまでも HIV やエイズで亡くなられる方はおられます。HIV 感染症が世界で猛威を振るいだしてから 40 年。まだ人類は HIV を克服することはできません。ですが、もう一度申しますが、検査を受けて早く見つけて早く治療を受ければ、性生活を含めて通常の生活を送ることができるようになりました。ものすごい進歩だと思います。

世界中には 4 千万人の HIV 感染者の方がおられると耳にしています。経済的な理由や情報が行き届いていないなどの理由で、治療を受けられない方が大勢いらっしゃる状態です。残念ながら、新型コロナウイルスのパンデミックを迎え、HIV の課題は後回しにされる流れも出てきてしまいました。HIV で亡くなられる方が少しでも減り、あるいは HIV 感染される方の数も減り、たとえ HIV 感染されても健康でいられる方の数が増えること。それは長く HIV の問題に携わってきた私にとっての願いでもあり、望みでもあります。ある意味、私の人生は HIV というウイルスによって定められました。変えられたともいうべきかもしれません。それくらい、HIV ひとつとっても、ウイルスというものは強烈なインパクトがあります。

最近見たあるドキュメンタリー映画で、アメリカのラストベルトに住んでいる方が、こんなセリフを言っているシーンがありました。

「ネガティブな出来事があっても、それを糧にポジティブな生活を送ることができる人はうらやましい。ネガティブな出来事がそのままネガティブなインパクトを与えて僕の生活は終わる」

HIV やエイズに関連したセリフではありませんが、HIV についてはそんなイメージを持っている人が多いと思います。感染したらおしまい、感染したら死ぬ、そんなイメージです。いまでも、情報は不足していると思いますし、市民も HIV の治療の進歩のことは知らずに生きているのではないかと感じるが多々あります。30 年近く活動してきた私ですが、まだそのイメージが払しょくしきれていないのは残念だな、力不足だな、と感じます。けれども、HIV にたとえ感染しても、治療を受ければ生きることができる、そして治療を受ければ他の人に HIV 感染させることはない、それは強く知らせたいメッセージだということには変わりません。強く知らせたい情報です。絶対に知ってもらいたい情報です。

亡くなられた方々、今生きている方々と、私もこの世に居る残りの人生で何をすべきなのかについて、祈りのなかで対話していきたいと思います。そして、その道が自然に見えてくることを心から願っています。

無実の守大助さんのために私は何ができるのか

森田麻里子（東京聖三一教会信徒・人権委員）

「仙台・北陵クリニック事件」で無実を訴える守大助さんを支援して 12 年になります。この 12 年の支援内容をお伝えします。

1) 守大助さん支援の経緯

2007 年秋友人から依頼され、仙台拘置所に手紙を書き、すぐ守大助さんから無実を訴える手紙が届きました。2008 年 2 月最高裁が上告を棄却し、無期懲役が確定。3 月仙台拘置所の守大助さんに面会しました。守大助さんから人権委員会、聖公

会平和ネットワーク宛の手紙が同封され、「聖公会に助けて欲しい。」と書かれていて、それぞれ当時の代表の方にお渡ししました。7 月守大助さんは千葉刑務所に移送されました。秋に聖公会有志「一羊会」を立ちあげ、千葉刑務所に面会に行きました。

2) 千葉刑務所の面会・差し入れ

守大助さんは月に 5 回面会が出来、面会日が確定したら、手紙を書き、その手紙を受けとってか

ら、守大助さんが面会申請を刑務官に提出し、許可されるという手順です。面会は午後で、身分証提示の上で「面会が必要な理由」等申請書に書きます。隣の窓口で、現金・書籍差し入れをします。面会室の扉が開いた瞬間の守大助さんの笑顔に心底ほっとします。面会時間は20分で、面会者を気遣う守大助さんの優しさに励まされます。

守大助さんは炊事場の作業をしています。受刑者約1000人の食材の準備は重労働です。時給は40円です。胸痛くなります。また毎月送る本の中に守さんが大好きな韓国ドラマ関連書籍を入れています。守大助さんは休みの日に限られたチャンネルで韓国ドラマを観ています。

3) 再審開始の扉が開かず

2012年守大助さんは仙台地裁に再審請求。2014年仙台地裁棄却、2018年仙台高裁に即時抗告棄却。2019年最高裁特別抗告棄却。再審開始の扉は開きませんでした。仙台地裁・仙台高裁には直接行き、「再審早期開始」の要請をしました。最高裁の要請では国民救援会の要請に参加しました。支援団体が48あり、ご両親は全国各地の支援団体で無実を訴えています。現在、守大助さんは2回目の再審請求の準備をしています。

東京教区はキリスト者平和ネットに加入しています。キリスト者平和ネットの内閣府要請に参加し、昨年11月の「再審法改正」の要請では次の守大助さんの手紙を載せました。

「どうか一日でも早く再審法改正を実現させてください。これまで私の裁判では、一度も証拠開示を裁判所が認めてくれません。本件では薬品が使用されたと検察が主張し、その使用されたという薬品容器があるとされ、しかもその容器からは指紋が検出されているというのに、容器を開示し

ない、指紋が明らかにされない。裁判所が‘必要ない’として開示を認めません。再審における証拠開示には何一つルールがありません。開示されるか否かは、裁判官の個別的判断・裁量に委ねられることにより、法の下での平等というのが、全く守られていません。無実の者はいったいどこへ訴えれば、公正な裁判が受けられますか。病院や学校を選べても、裁判所を選ぶことはできません。無実の人たちを助けてください。再審法の改正を行ってください。2020年 守大助」

4) 新しい冊子「守大助さんの詩文集&裁判資料～無実の人は無実に」

守大助さんは29歳で逮捕され、今年50歳になります。えん罪の苦しみ、ご両親への思いを詩文にされています。人権委員会・「一羊会」共同で2冊の詩文集を発行しました。再審請求準備へのエールとして新しい冊子を発行します。A4サイズ12ページ、1000部を外注します。50円で販売し、売上の3万円を詩文の著作料として守大助さんにお届けします。

5) 守大助さんをささえてください。

守大助さんはクリスチャンではありませんが、刑務所内の聖書の会に参加されています。人権委員会の司祭が面会して下さったことは守さんの大きな癒やしになったことと思います。再審開始・無罪確定には証拠全面開示等の大きなハードルがあります。是非守大助さんの苦しみに寄り添い、手紙を送ってください。共に希望の灯を掲げてください。

◇手紙の宛先

〒264-8585

千葉市若葉区貝塚町192

守大助さま

遠い春
やがて季節が変わる
今は冷たい日々だ
次こそ 本当の春が…
そう信じて 生きている
辛い月日がつづく
胸がはりさけそう
そんな日でも
僕は耐えて 生きる
十四年も耐えて生きている
遠い春…
本当の春…